

## 黄瀛と草野心平の越境体験から見るその詩歌の特異性

著者	楊 偉
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	7
ページ	193-211
発行年	2009-10-29
URL	<a href="http://doi.org/10.15002/00022619">http://doi.org/10.15002/00022619</a>

# 黄瀛と草野心平の越境体験から見る その詩歌の特異性

楊 偉

## 一 中国人黄瀛と日本人草野心平の交友関係

中国四川外語学院日本語学部創立者の一人である黄瀛は1906年、中国人の父と日本人の母との間に生まれた。父親黄沢は重慶にある川東師範学校校長、母太田喜知は千葉県八日市場出身。母は女子師範学校卒業後、地元の小学校教員をしていたが、まもなく「日清交換教員」として中国に渡る。父の死後、黄瀛は中国国内を転々とした後、母、妹とともに母の故郷たる千葉に移り住んだ。1914年、八日市場尋常高等小学校に入学。1919年、中国籍のため、公立の成東中学への進学が不可能となり、東京の正則中学に入学。関東大震災を契機に中国に戻り、青島の日本人中学校に入った頃から日本語で詩を書き、日本の新聞や詩誌に掲載されるようになる。1925年2月の『日本詩人』の第二新詩人号の一位に推され、明朗闊達な詩風で注目され、日本文学史上にも名を残す存在となった。『詩聖』という日本の詩誌に中国嶺南大学に在籍していた草野心平の詩も掲載されているのをきっかけに二人の交友が始まり、ガリ版刷りの同人誌『銅鑼』が創刊された。黄瀛は詩人になろうとして、東京に帰り、草野心平も上海に端を発した排日運動が中国全土に広がったため、帰国する。中国を追い出された日本人草野心平を東京で迎えたのは中国人黄瀛であった。草野心平は「黄瀛との今昔」（『詩と詩人』1954年）にこう書いている。「私は五・三〇のあふりを受け『銅鑼』の二号をトランクに入れて日本にかへってきた。東京で迎えてくれたのが黄瀛である。神戸で坂本に会い、大阪で原理に会い、そして、途中から当時はもう中学を出て、東京で受験勉強中だった黄瀛に電報を打った。…それから約一ヶ月の彼の下宿への居候がはじまったのである。」かつ

ての嶺南大學の同窓生で、当時南京政府宣伝部長だった林伯生の招きで、1940年宣伝部員として再度中国に渡った草野心平が日本の敗戦により、家族とともに南京日僑集中營に収容されたときに、この不遇な心平の世話をしたのも中国人黄瀛であった。その再会について、黄瀛は次のように書いている。「かれは汽車輸送待つ間のしばらくを南京日僑集中營に入っていた。ぼくは二、三日に一回位彼を呼び出してはお酒のごちそうして慰めた。上海から日本へ遣送する時もぼくはわざわざ上海まで出かけて見送った。かれは雨の中のトラックの上で手をふりふり、ぼくと別れた。」<sup>1</sup>

一方、1984年、黄瀛の半世紀ぶりの訪日を実現させるのに多大な貢献をしたのもまたこの一生涯の詩友である草野であった。「もうひとつ特記すべきことは、戦後第一回めのぼくの日本行きはもしも草野心平、宮川寅雄両君の呼びかけがなかったら、実現不可能であった。彼らのぼくへの友情を中川（一政）さん、井伏鱒二さん各位及び各界の、江湖の士に依る好意は忘れられない。」<sup>2</sup>二人は1998年に草野が亡くなるまでずっと交友が続いた。二人の交友は『銅鑼』や『歷程』などの詩誌を介して、宮沢賢治、高村光太郎といった詩人とその詩によって友情の輪を成し、文化と国家の垣根を越えて、日本詩の歴史だけでなく、中日文化交流史においても文化越境者としての輝かしい一ページを残したのである。

## 二 黄瀛と草野心平の越境体験

周知のように、文化の境界を越え、異文化と接触することにより、どのような新しい芸術的創造が可能になるのか、そのメカニズムを20世紀の経験に基づいて分析し、現代世界における越境的な芸術・文化のあり方を解明することは今世紀の課題となっている。もし越境者を画一化されたひとつのカテゴリーに還元されない、複合的な文化的存在として捕えるなら、黄瀛も草野心平も中日文化越境者の典型と言えるだろう。二人の交友関係も文化越境の具体的な実践の一ケースとして、我々にヒントを与えてくれるものと思われる。

越境者と言っても、黄瀛と草野心平はいろいろな意味で似た存在でもあるし、対照的な存在でもある。前者は中国人でありながら、父の病死で母に連れられ

て千葉に移り住み、青島日本中学校における二年間の生活を除いて、日本で青少年時代を過ごしたのに対して、後者は日本人であるが、中国の嶺南大学（今の中山大學）に留学、中国で青春の4年間を過ごし、在学中、英米詩に魅かれて、翻訳を試み、詩を多作したのみならず、社会主義、アナーキズム系出版物にも触れた。中国人としての日本体験と日本人としての中国体験、つまり越境体験によって、二人は似たものとして親近感をもち、容易に心を打ち明けることができる詩友となれたのではなかろうか。それで、「早春登校」が掲載された『詩聖』に心平の「無題」があわせて掲載され、編集後記には広州の嶺南大学からこういう詩がきたが、日本人か中国人かどっちなのだろうかと言うような一文があったのをきっかけに、「一体あなたは日本人なのでしょうか中国人なのでしょうか」という親愛とも問いあわせともつかない手紙を黄瀛は心平に送ったのである。これは自分と似た者を求めているメッセージと受け取れる。単なる同じ詩人という同類意識というよりも、同じ中国から詩を投稿したという同類意識の方が大きく働き、黄瀛を心平に引き寄せた直接的な誘因になったのだろう。心平のこの時の中国体験がなければ、二人の生涯にわたる付き合いはなかっただろう。つまり、殆どの日本人が西欧に目を向けていた当時において、日本から中国へ留学した草野心平は変わった存在であり、普通の人とは違う越境体験を持つ心平に親近感を覚えて、文通が始まったのである。

日本に渡った黄瀛は東京での交友範囲を広げ、中野秀人、高村光太郎、栗木幸次郎、高樹寿之助など多くの日本詩人と親しい付き合いに発展して、日本詩歌の栄養を多く摂取したのに対し、心平は広州で英米詩を耽読するだけでなく、文学研究会広州分会に加わり、魯迅の『阿Q正伝』と中国白話詩人の詩を読んだりして、梁宗岱、劉燧元などの中国詩人と親友になった。黄瀛は日本人の女友達を作ったのに対し、心平も中国人の廖夢醒と恋に落ちたのである。二人ともこういう異国での交友関係と恋愛感情などを通して、普通では考えられないような人間関係や人脈の形成を促し、その後の生き方を方向付けることになる。その後、帰国して、国民党の軍人になった黄瀛は戦争という極限状況に置かれても、個人レベルの中日関係を大切にしてきた。国同士が敵対関係にあらうとも、個人の関係においてはその限りではない。草野心平もそうだった。廖夢醒との兄妹のような感情、廖承志との兄弟のような感情、ほかの中国人と

の友情は戦後の心平にとって、中国との関係を支える礎石にもなった。この二人の交友は常に国と国の壁を乗り越えようとしているのである。次の詩句が戦争時代の黄瀛の心境を生き生きと語っている。

つまらない夢の延長なる戦争を回想しながら、  
草野よ！  
おれがねむらないで君をねむらせたものだ。  
それともオレがオレで、  
君が君であるべきか！  
君の安眠薬のでたらめさよ！  
——オレはやはり詩が書けなかった……  
——オレは石井鶴三描く宮本武蔵を見ながら目をつぶれば  
花も見えない戦争も見えない  
君も見えないオレも見えない  
かそかないびきとともに  
たのしいたのしいちがった世界へ引きずられて行く<sup>3</sup>

黄瀛の友人でもある高樹寿之助（後の菊岡利久）は「黄瀛のパイプ」という文章で黄瀛と心平が別れ際に交換したパイプというささやかな道具に触発されて、「一人の日本人が一人の中国人と真の友たり得るならば、勝敗を超越した「世界」と信じます。そこから始まります。あまり大きな、例の標語式では駄目です。対一から行きます。愛と誠実にあふれて。」<sup>4</sup> という結論にたどり着いている。こういう越境者の交友は自国のイデオロギーを乗り越えて、民間の文化交流の一つのモデルとして、「文明の衝突」が多発している今日では、異文化理解と異文化交流にヒントを与えてくれるものと思われる。

### 三 草野心平の越境体験と詩歌の特異性

異文化との接触は、二人の文学観の形成と詩の創作に決定的な影響を及ぼした。草野の場合は、詩的契機の殆どすべては嶺南大学で培われ、作品行為とし

て成育していったことはすでに多くの研究者によって指摘されている<sup>5</sup>。詩人としての心平の「青春の中心」が越境体験のメイン実施地である嶺南大学にあったのも当然であった。つまり嶺南大学は心平の詩的人生のすべての根、基地、出発点であった。生涯2度中国と深く関わった草野心平は『わが青春の記』、『支那点々』、『点・線・天』、自伝中篇『動乱』など、この嶺南大学時代を振り返った文章が多い。「この間、草野心平は徹底した個人主義をつらぬくことで、自己形成としての中国を身につけていく。私にはきわめて稀な中国体験の気がしてならない」<sup>6</sup>と詩人倉橋健一氏が言っている。「詩友、草野心平兄を悼む」という文章で黄瀛はこう語っている。「わが草野君を思うにつけ、まず彼は若い時からみまかるまで即ち一生涯ロマンの人だったと言いたい。事実ばくの見た草野心平は広州・嶺南大学でたった一人の日本人留学生の頃からそうであった。故国を離れて、孤独と寂しさの中で遠く所謂大正ろまんを意欲的に求めたかれ。この多情多感な青年の詩の基点はそこから始まると僕は言いたい。」<sup>7</sup>この言葉はそのまま黄瀛自身にも当てはまるものである。詩人としての黄瀛の「青春の中心」は東京にあり、故国を離れて、孤独と寂しさの中で、「合の子」としての悲しさを味わいつつ、中国人であるアイデンティティーを強く意識させられた。二重血統、二重言語と二重文化の持ち主であるが故に、その二重性に引き裂かれながら、詩人としての感受性をいっそう洗練させ、詩のロマンを意欲的に求めてきた。二人とも異国の孤独と寂しさの中で、詩というはげ口を見つけたのである。「その後、同人誌『銅鑼』、『学校』、そして『歷程』で『一つ旗の下のかれとわれ』であった。だが、詩作品の上では何ら大した影響もなかったようだ。もしもあればあの頃お互いにライバル意識を持ち合い、刺戟と励み合ったことは確かだ。」<sup>8</sup>つまり、詩風での相互影響はあまりないが、同じく異国で詩を書くこと、詩壇ではちょっとはみ出した存在であることは二人を近づける最初の絆となり、後に詩人としてのライバル意識を促したわけである。

心平にとっての中国の意味について、辻井喬氏は「心平さんのこと」という文章で、次のように述べている。「草野さんの中国に対する心情のスケールは全く普通の人の思い入れとか憧れというレベルを超えていて、心平さんの詩の世界にとってはなくてはならない存在として位置づけられていたのだという

印象が強かった。ということは、心平さんの詩の世界の地上の容れものとしてはあの広々とした中国平野や、天山山脈の広がりが必要だったということだろう。」<sup>9</sup> 宗左近氏も「心平の宗教」に触れた時に、「お経よりも自分の詩のほうが宇宙の真実を孕んでいると考えていただろうか。…心平さんがどれだけ仏教の教典を読んだか。それは知らない。ただ読んでも仏陀の説く法（真理）が観念的だったり、図式的だったり、嫌だったのではなからうか。それよりも一種の中国思想の“天”のほうが実体的であって、心平には親しめたと思える。…天が心平さんの宗教に近かったと思う。…天を含む大宇宙。そういうものを心平さんは信じていたのではなからうか。」<sup>10</sup> つまり心平の詩に出てきた青い天と大宇宙は中国思想の「天」の影響を受け、中国の広々とした平野と山脈を背景にしてこそ成り立つものである。心平の詩は「原始的な庶民感情」というよりも、むしろ原初的な人類感覚によって、「大いなる感情」の世界を創造すると多くの研究者によって指摘されてきたが<sup>11</sup>、奥のどこかに思想的、観念的、原初的な生命哲学のような要素があるように思われる。心平の詩には「詩は情」という日本の文学伝統としての短歌的な抒情詩に取まりきれないものが大いにあるという印象がある。このことは彼の中国文化の越境体験と無縁ではないと言っても、過言ではないだろう。

そして、心平を日本語の音感に目覚めさせたのは嶺南大学の「詩の会」で、山村暮鳥の詩を心平がアメリカ人、中国人相手に朗読した時である。

春だ  
春だ  
朝だ  
雨あがりだ  
ああ いい

というように始まる詩だが<sup>12</sup>、一行一行の短さ、歯切れよさ、頭韻と脚韻から来るリズム感をもって、アメリカ人の教授を「まるでスペイン語そっくりだ」と絶賛させた。国際的にも係属論的にも孤立した膠着語とされてきた日本語は世界の主流を成す西欧語と大いに異なり、それを話す日本人は時にある種の劣

等感を持ちやすいと言われている。アメリカ人教授から「スペイン語そっくりだ」などと言われて、心平は初めて日本語の単純な組み合わせ（特に長母音）の美しさに気づいたわけである。ちょうどその時から彼は嶺南大学校文科大学に新設された日本語講座の講師をやり始めたので中国人相手に日本語を教えることによって、日本語の特色と本質に目覚めていく。「それまでの私はヨーロッパのすべての国語や、中国語などのはっきりした音韻にきき耳はたててはゐたが、日本語にはまるで音韻がないといふ風に、卑下ではないが、決めこんでゐたところがあった。…その時からである。私が日本語は日本語としての独自の、そして普遍的ともいふべき音感を包蔵してゐるのだなといふことをまとも感じはじめたのは。…日本語ほどの独自性をもつてゐる言葉は全く他にないといつてもいいのではないかと思ふ。男性的な漢字と女性的平仮名とシュリケンのやうな片仮名とがいろいろ混じって、独得なニュアンスをつくつてゐる。言はば雄雌同体の動物がアイクチをしのばしてゐるみたいである。これは私にとっては面白い。他の国語にはない状態だと思ふ。このやうな国語で詩を書けるといふことは恵まれてゐると私は思つてゐる。また造型的にみても漢字と平仮名と片仮名とが自在に構築してゐる一つの伽藍のやうにも思へるのである。」（詩集『凸凹』の「覚書Ⅱ——新仮名から旧仮名へ」）心平はこうした理念を実際に形象化して見せた。たとえば詩「磐城七浜」などがその例である。

イワキ 片仮名のするどさと。

いわき 平仮名のなだらかさと。

磐城 その漢字の頑丈さをもつた磐城七浜を

常に新しい太陽はまんべんなくてらす。

草野心平はついに「書」まで論じ、書くことにもなるが、これも心平の言語論の一部、あるいは発展である。考えてみると、日本以外の漢字文化圏で生活した体験が心平の日本語発見につながるものが少なくないと思われる。また、心平における言語、日本語の問題はそのオノマトペや、蛙語も避けては通れないのだが、異文化との接触がなければ、母国語の特色とリズム感などを生かすどころか、見極めずにいた恐れがある。つまり、心平の詩における越境体験の



存在は軽んじることのできないものである。

#### 四 黄瀛の越境体験と詩歌の特異性

黄瀛の場合を見てみる。中国人の父と日本人の母の間に生を受けた彼は出生そのものも一種の越境行為の結果であって、彼の生き方自体にイデオロギー、民族、国境を越えたマルチカルチャーを擁する可能性を備えていた。幼少のころより東京周辺で生活し、日本人の詩友を大勢作ったこともあって、中国の国籍を持ちながらも、日本語の詩を書き続けた。東京での詩の遍歴は彼の一生を方向付けるものとなり、「時間、空間、中でもまれ、もまれて、いつ、いかなる場合にも詩は私の道連れ」（「夾竹桃の花」<sup>13</sup>）と断言する詩人黄瀛を生んだわけである。「詩を生きてきた」「詩馬鹿」という自分への位置づけから見ても、彼は自分の生の本質をほかならぬ詩に求めてきたと言える。それなら、彼の一生における東京と日本語の存在は、生まれ故郷の重慶と母国語の中国語よりも重いという言い方も成り立つと思える。彼にとって日本語は母語に近い存在であり、東京は永遠なる心のふるさとであった。また、「中国の日本語詩人」という呼び方も日本詩壇における彼の特異性を象徴している。その特異性はまず「合の子」という出生の特異性に現れ、そしてその詩歌の特異性にも現れる。「スペインの兵隊、尾崎喜八は彼のことをそういふ。成程彼は日本人でも、支那でも、またスパニッシでもない。黄瀛である。全くくぎられた黄エイでもない。彼はのんびりして自由だ。彼の詩を見て、彼を想像するのが一番間違ひのない見方である」（『南方詩人・黄瀛詩集記念号』草野心平）「少しどもる口調にも魅力があって、どこか日本人と違う面白味が詩にも朗読にもあった。」（『高村光太郎全集 10 巻』341 頁）「彼は少し吃った。少しばかりか吃りの余音が異常に美しい印象を僕に與へた彼は少し書体の変った日本離れのした感じのよい名刺を一枚呉れた。」（『南方詩人・黄瀛詩集記念号』木山捷平）「東方の詩風帯に育ったといふ黄さんはその気持ちの好いエキゾティシズム、コスモポリタニズムで私たちをうらやましがらせました。」（『南方詩人・黄瀛詩集記念号』堀壽子）以上見てきたように、黄瀛がなぜ同時代の詩人たちに注目されたのかというと、次の言葉がキーワードになるだろう。「日本人でもない中

国人でもない」、「日本人離れ」、「日本人と違う面白味」、「エキゾティシズム」、「コスモポリタニズム」などである。これらの特色は詩の世界の中では、新鮮そのものとして際立ってくる。

『銅鑼』同人だった詩人小野十三郎は晩年、黄瀛の特異な日本語使用に魅せられていることを次のように語っている——「黄君の詩の魅力は私にとっては同時代のほかの詩人には見られなかった新鮮な言葉の行使の仕方であった。黄君が詩を書く時の言葉の異常な屈折はちょっと真似ができないもので、私はそこに強く牽かれていたのである。」（「黄君の日本語」）<sup>14</sup>

同時代の詩人による以上の発言を裏付けるために、「喫茶店金水——天津回想詩——」という黄瀛の詩を見てみよう。この詩は黄瀛が家族とともに天津の租界（外国人が居留地区の警察・行政を管理する地域）で過ごした日々を表現したものである。

あの日本租界の富貴胡同近くで  
 フネフネと云はれた夏の夜は  
 ようくアイスクリームやソーダ水をすすったものです  
 白いゲートルの可愛らしい中学生姿で  
 三人の少年が  
 晚香玉の匂ふ初夏の夜更けに  
 ぽっかりと  
 ぽっかりとあの喫茶店金水におちつくのは  
 冷んやりした夏の夜露のおりころ  
 時計がいつも寝ぼけて打つ十二時近くです  
 しかも夜の電影と白河河岸  
 緑のフランス花園を歩き疲れたものにとっては  
 あの金水のアイスクリーム  
 白いプリンソーダの味のよさは  
 実に心にしみるくらゐです

ああ、あの裏町富貴胡同近くで

フネフネとさはがれた去年の夏の夜は  
よくアイスクリームやソーダ水をすすったものです  
あの涼しい喫茶店金水の灯のもとで  
美しくたれ下る糸硝子を眺め乍ら  
ひるまの暑さをも忘れて  
三人の少年がころよく語った夜更けの快適さは  
今の自分にとっても早一昔の夢のやうです

あの朝鮮の美しい女が沢山いるという富貴胡同近くで  
アメリカの無頼漢兵士の一人歩きを不思議に思ったり  
フネフネとよぶ車夫の言葉が  
どうしても分からなかった去年の夏は  
いまの僕にとって  
ほんとに懐かしい思ひ出の一つ  
も早『すぎ去った純真時代』と云はれてゐます。

(『日本詩人』大正14年9月号)

この詩の最大な特色は語韻上の音楽感と「新鮮な言葉の行使」にあると思われる。この詩について、萩原朔太郎は同年11月号『日本詩人』に載せた「日本詩人九月号月旦」の中で、次のように述べている。「黄瀛君の詩は第二新人号で桂冠詩人に推選された時から、私の注意してゐるものである。黄君の情想は気質的に軽快で明るく、それに貴公子風でもある。君は好い意味での気質的健康性を有してゐる。君が表現に卓抜な天稟をもってることは以前からも認めてゐたが、今度の支那景物詩『喫茶店金水』をよんで、その語韻上の音楽的天稟に始めて気付いた。君は実に音楽的な好い耳を持ってゐる詩人だ。(中略)『フネフネ』といふ語の鼻音的な発韻が、いかに美的でよく利いてるか。それから三行目で『よく』と言ふべき所を故意に『ようく』と言ってるのを見ても、語調の節奏的美感に神経の過敏なことがはっきりわかる。(中略) いったい外国人といふものは他国語に対して非常に鋭敏な耳を有するものだ。たとへば日本人は、フランス語や英語に対して、それらの国民自身が感ずるよりも、遙か

に音楽的の語韻を強く感じてゐる。黄君が日本語によい耳を有してゐるのも思ふに恐らく彼が外国人（支那人）のためであるだろう。」

萩原朔太郎が鋭く見極めたように、黄瀛詩にある音韻上のリズム感は黄瀛が外国人であるゆえに却って敏感に感じとったものかもしれない。日本式の教育を受けてきたとはいえ、黄瀛には半分中国の血が混じっている。そのためか、詩友の証言にもあったように、黄瀛は幼いころからどもりがちであった。でも、日本語吃音者である不利な要素はかえって詩を作るうえで幸いした。つまり、日本語には日本人以上に敏感になって、いい耳ができたので、ほかの日本人詩人にはまねできない音楽感とリズムを紡ぎ出したわけである。それは草野心平が外国人相手に朗読した時に、初めて日本語の音楽感に気付いたのと同じ原理かもしれない。

また、「新鮮な言葉の行使」とは何かというと、その詩の多くに日本語のほかに、カタカナ語、中国語、場合によっては、フランス語、英語<sup>15</sup>などの言葉もそのまま何の抵抗もなく自由自在に使いこなされていて、多言語のオンパレードという感じさえすることだろう。

これも日本人でもない、中国人でもない黄瀛しかできない技かもしれない。その詩に出てくる背景、小道具もなんとなく異国情趣にあふれている。この「喫茶店金水」だけを見ても、短い詩に「アイスクリーム」、「ソーダ水」、「ゲートル」といったカタカナ語が多用されている上に、「租界」、「富貴胡同」、「花園」、「電影」といった中国語がそのまま織り込まれている。中国の天津を舞台にしている回想詩であるが、「フランス花園」、「朝鮮の美しい女」、「アメリカの無頼漢兵士」など国名を際立たせることによって、多国的、あるいは異国情趣が作り出されている。これらの技法を意識的というよりも、本能的に駆使してエキゾチックな雰囲気醸し出し、現代日本語の口語の可能性を拡大することに成功していると言えよう。その故に、「事実彼の詩はあの頃の日本詩界の新風であった。せるを着る頃の、氷屋のすだれに風のたはむれる頃の、また光りと青空の、そんなさはやかな新風を彼は日本の詩界に注ぎこんだのである。」<sup>16</sup> 黄瀛の詩は「抒情性の強い作品が大部分だが、不思議な味わいを持って、西欧の知性と東洋の感覚との混沌とでも言えばよいのか、多少エキゾチックな感じもあった。」<sup>17</sup>

日本人からエキゾチックと言われているが、中国人の筆者から見ても黄瀛の詩はエキゾチックであって、少し極端に言えば、純粋な日本詩であるとも言える。『景星』『瑞枝』という二つの早期詩集（詩集として出版されたものはこの二つしかないが）を見ると、黄瀛詩に共通するその特色がわかる。とりあえず『景星』の中の詩を三編見てみよう。

### 風景

カソリック教会堂によわい日ざし  
消防署の塔の頂上は白い雲

日傘が行く  
汽笛がきこえる

電車が通るたびお濠の水がゆれる。

### 早春

今日、町は非常な日光浴だ  
寒い風も吹かないし  
少ししめった道路は春の土色だ  
僕が自転車のケツへ妹をのっけて  
日本租界の方へ行ったら  
春が来たなんて日本の子供がうたってたっけ

### 年末小詩

年のくれで母上はまだおやすみにならない  
だのに僕はベットの上で新年号の中央公論と婦人公論とを見てゐる  
ああ、すまないな

これらの詩は溫和、平明な言葉で日常のさまざまな事物や生活体験をうたっているが、いずれもみずみずしい色彩とあふれる香りと、その情景のスケッチ

の確かさがあって、読む側をうっとりさせる魔法を持っている。純粋な抒情詩、景物詩と言ってよく、明らかに即物的で、脱観念的である。まさに『景星』の後書きに黄瀛自身が書いたように、これは「小さい可愛い詩集」である。そこに収録されている詩「すべて僕の所謂小さい可愛い詩」、「それは大陸風景、コダック、双眼鏡、ペーパーナイフかもしれない。時としてはチューイングガムか愛するシェパードかもしれない」（『景星』後書）。筆者から見れば、それはいかにも俳句の世界である。しかも中国詩の正統から遠い存在である。その即物的、脱観念性的なところから、黄瀛詩は中国の文学伝統よりもむしろ日本文学伝統の流れを汲んでいると言えよう。「黄瀛詩は、その根本はやはり抒情詩であり、その意味ではまぎれもなく日本の詩人だ」<sup>18</sup> という勝又浩氏のご意見に大いに賛成する。それに対して、草野心平の代表詩集の一つに数えられる『第百階級』を見てみよう。

蛙はでっかい自然の賛嘆者である  
 蛙はどぶ臭いプロレタリアトである  
 蛙は明朗性なアナリススト  
 地べたに生きる天国である  
 —— 詩集の冒頭

さむいね  
 ああさむいね  
 虫がなっているね  
 ああ虫がなってるね  
 もうすぐ土の中だね  
 土の中はいやだね  
 痩せたね  
 君もずるぶん痩せたね  
 どこがこんなにせつないだらうね  
 腹だらうかね  
 腹とったら死ぬだらうね

死にたくはないね  
 さむいね  
 ああ虫がないてるね

——「秋の夜の会話」

草野心平は1928年に出したこの『第百階級』で蛙ばかりをうたった作品を集め、さらに生涯を通じて『蛙』、『定本・蛙』『第四の蛙』と書き続けたことから、よるべない底辺の生活者の深い響きを持つパーソスあふれる世界に親しんだ人からは蛙の詩人と称されるようにもなった。『第百階級』について、伊藤信吉は「詩的思考は全体としてアナーキズムに傾いている。」<sup>19</sup>と言っている。上記の「秋の夜の会話」は冬眠という生と死のぎりぎりのせめぎ合いに向かう秋冷えの夜に、死を目前にしながらも、精一杯に鳴く虫の声に耳を傾ける二匹の蛙の対話であるが、「虫を含め、生き物たちの作り上げる生命の交響が苦しい現実社会に生きる下層階級の人間の姿に重なり合う。生命への慈しみの衣の陰に秘かな政治性が隠され」<sup>20</sup>ているのは確かである。庶民的生命力や反抗精神を蛙に託した「第百階級」ほか、草野心平は独特な社会的感覚、乃至宇宙感覚をもつ詩を作る。知と情が渾然と交じりあう希有の詩人として、心平詩における青い天と大宇宙は中国思想の「天」から影響を受け、中国の広々とした平野と山脈を背景に成り立ったものと言ってよく、どことなくその抒情の裏に思想的、哲学的、観念的な部分が大いにある印象が拭えない。その「表現の誇張や観念性が云々され、戦時下の詩集を問題視されることもあるが、伝統詩歌の表現法を超脱した独自の表現への評価が高い。」<sup>21</sup>草野心平の詩について、黄瀛は「白日の美しさ。月のやうなこの南方の詩人の情熱。これは確かに彼が本国の猫も杓子も同じうするものではない」<sup>22</sup>と言っている。しかし、心平にとっては、中国体験なくして、伝統詩歌の表現法の超脱は可能だったろうか、疑問に思わざるを得ない。もし、「詩は志」というのが中国古くからの文化伝統であり、「詩は情」というのが日本文学全体を支配している伝統であるという説が成り立てば、どちらかと言うと、黄瀛の詩よりも純粋な日本人である心平の詩のほうが中国詩に近い要素が見られると考える。その背後に詩人としての資質以外に、異なる越境体験が大いに働いたことを指摘したい。

## 五 草野心平、黄瀛及び『歷程』同人のコスモポリタニズム

「さようなら中国」は草野心平が1946年帰還船で帰国したときの出航時をテーマにした作品である。この作品の中で心平は「ひとつのふるさとからいつの間にか俺にはもう一つのふるさとが出来。二つが別々のふたつであり、さうして一つであることの命脈から。」<sup>23</sup>と書いて、中国と別れることへの断腸の思いを詩にした。中国は心平のもう一つのふるさとであったように、中国人と日本人の血が流れている、この変えがたい事実によって日本もまさに黄瀛のもう一つの祖国であると言える。でも、「日中の不幸な時代への突入が、日中のアイデンティティーを均衡してもった黄瀛氏の飛翔の夢と機会を奪いました」<sup>24</sup>という与謝野薫氏のメッセージにあるとおり、勃発した中日戦争によって、もともと均衡して保った中日という複合的なアイデンティティーが二つに分裂され、対立するまでに至った。二重アイデンティティーに引き裂かれて、中国と日本の境界に立つ自分自身のあり方をずいぶん不安に思ったことは想像に難くないが、一方、自らの二重アイデンティティーの責任をとって、それを引き受ける形で詩の本質に迫る詩を作ったのではないだろうか。二つのふるさと（または祖国）を持っている人間は必然的に二つ以上の文化を渡り、常に越境せねばならず、そのどれにも拘らず、流動的にしかし自分自身を失わずに生きていくことが必要であるし、またそういう可能性も開けてくる。二つの文化を歩き、行き来することで、多様性や、差異性に必然的に曝され、揺れ動く自分と対話せざるを得ないことによって、異なる文化に対して、複眼的な認識を持ち、コスモポリタンの意識が芽生えてくる。そこから民族、国境を越えたあらゆる国や、民族に共通するコスモス型文学が生まれやすいと思われる。

同人誌『歷程』創刊に際して、草野心平は次のように語っている。「『歷程』に発表される詩が世界のどこの言葉に翻訳されても、それが立派に通じるような、他の国の良知の人々をも刺激し得るような、そんな詩が目白押しに並ぶことを我々は願望するものであります。我々はわが国の詩を常に世界的立場において思考し、旗も党も雑誌としては持たず、詩自体の中に没入します。」<sup>25</sup>つまり、『歷程』の目指しているのはコスモポリタンの詩である。そんなコスモポリタンの意識があらゆる生物にまで発展すると、心平流の「蛙」の詩歌



が生まれてくる。「そんな具合だから、心平は終生、天と地と人と蛙の間で、ある時は天と一体になり、また大地の上に立って、暖かい友情で国境のような人為的な仕切りを超え、人になり、蛙になり、つまり、天地有情のすべての要素と一体になり、輪舞を踊ることが可能なのであった。その意味では、インターナショナルというよりユニヴァーサルと言う語を用いるべきだと言った吉原さんの言葉はよく心平さんの詩の世界の本質を指摘しているように思う。」<sup>26</sup>これは心平に留まらず、黄瀛と宮沢賢治にもつながるものである。『銅鑼』の詩人たちはアナーキズムという標語で括られることが多いが、基底には政治や、文化の壁を越えた人類全体の幸福への願いがあったのは間違いない。この三人の詩に個別性、多様性と宇宙的連帯感を重視するコスモポリタニズムの旗が掲げられている。現代はグローバリズムの時代であり、多文化間の理解が不可欠な時代である。さらに、近年の地域紛争は新たな越境者を大量に生む時代でもあり、個々の人間を、画一化されたひとつのカテゴリーに還元されない、複合的な文化的存在としてとらえる観点から多文化状況を考えることが必要とされる。個々の人間がどうやって自己を開き、自らのうちに多文化性を認めていくのか、またその関わりにおいて芸術的創造にはどのような表現と機能の可能性が開かれているのかを考察することが重要である。これこそ今日、黄瀛と草野心平を文化越境者のモデルとして考察する意義と課題になるだろう。

最後に黄瀛が「紫陽花咲く頃」<sup>27</sup>に書いている次の言葉を引いておきたい。「男も女も年よりも若い人も日本人も中国人もそしてその他の外国人もエミグランドもみな紫陽花の花。沢山の紫小花が固まって、一つの大きな調和の花と咲く。詩は私たちの心の道連れ。」これこそ詩人黄瀛——もちろん心平も賢治もそうだが——の詩心であって、また一生、求め続けてきたコスモポリタニズムではないだろうか。

#### 注

- 1 黄瀛「詩友、草野心平兄を悼む」『歷程 369号 追悼・草野心平』1990年2月号 154頁。
- 2 同上 157頁。
- 3 黄瀛「心平への戯れ書——眠れないとはどんなわけか?」『人間』昭和21年7月号。
- 4 『美的』第九号 昭和54年5月15日発行 200頁。『日本未来派』第二号初出。
- 5 深沢忠孝「青春の中心」嶺南大学校文理科大学(2)——草野心平評伝ノート③『草野心平研究3』。1991年12月発行。

- 6 倉橋健一「中国の草野心平」『藍』2005年総第20号 278頁。
- 7 黄瀛「詩友・草野心平兄を悼む」『歷程 追悼・草野心平』1990年2月号 154頁。
- 8 同上 155頁。
- 9 辻井喬「心平さんのこと」『歷程 追悼・草野心平』1990年2月号 169頁。
- 10 宗左近「心平さんの宗教」同上 56頁。
- 11 吉田精一編『日本文学鑑賞辞典 近代編』東京堂出版 昭和35年 151頁。
- 12 深沢忠孝氏の研究（「青春の中心」嶺南大学校文理工科大学（2）——草野心平評伝ノート③）『草野心平研究3』によると、山村暮鳥の詩集を全部調べてみたが、この詩が出てこない。未定稿のまま破棄されてしまったのであろうと推測されている。
- 13 『歷程』1983年10月号 46頁。
- 14 小野十三郎「黄君の日本語」『詩人黄瀛 回想編・研究編』蒼土舎 1982年。
- 15 例えば、「夾竹桃の花」（『歷程』1983年10月号に掲載）という詩にも英語がそのまま織り込まれている。「詩／コレは確かに私の Favorite／今わたしは詩の樹下石上、裸まんたら、かくれ蓑姿／いつの頃か？多分カンゴクから出てきた直後／『歷程』は毎月一回、as a punctureに訪れてくれた」
- 16 草野心平「黄瀛との今昔」『詩と詩人』1954年。
- 17 栗原茂「『黄瀛』雑誌」『解氷期』16号 1983年4月15日発行 8-9頁。
- 18 勝又浩「黄瀛詩と日中の文学伝統」。国際シンポジウム「詩人黄瀛と多文化間アイデンティティ」における研究報告（要旨）（2008年10月25日、四川外語学院にて）。
- 19 『新潮 日本文学小辞典』新潮社 昭和43年 384頁。
- 20 安藤元雄ら監修『現代詩大辞典』三省堂 2008年 207頁。
- 21 同上 206 - 207頁。
- 22 黄瀛「草野心平論」『日本詩人』1926年9月号。
- 23 尾崎秀樹「療養の日に」『歷程 追悼・草野心平』1990年2月号 72頁による孫引き。
- 24 国際シンポジウム「詩人黄瀛と多文化間アイデンティティ」へ贈る与謝野薫氏のメッセージに「（与謝野）晶子が4代のころは社会的にも活躍していたところで文化学院の学監を引きうけ校長を補佐しながら、教壇にも立ったといえます。黄瀛氏と並んだ写真もあり、祖母のことだから詩人として成長していくであろう若い知性に夢を託していたことと想像されます。しかし、日中の不幸な時代への突入が、日中のアイデンティティを均衡してもった黄瀛氏の飛翔の夢と機会を奪いました。日中を飛び交う偉大な詩人が誕生していれば、どれほど日中にとってすばらしいことであったことか……。祖母が長生きしていれば、戦後、生き延びた黄瀛氏の再会をきっと待望したことと思います。祖母の歌も黄瀛氏の詩も不死鳥のようにいまも日中の多くの人々の心をふるわせ続けています。日中関係も日中の知性を併せ持った黄瀛氏を探ることは日中友好の道に通じることと確信いたします」とある。
- 25 『歷程』復刊第一号（1947年7月）の編集後記。
- 26 辻井喬「心平さんのこと」『歷程 追悼・草野心平』1990年2月号 169頁。
- 27 『歷程』1984年9月号 19頁。

#### 主な参考文献

- 1 佐藤竜一『黄瀛 その詩と数寄な生涯』日本地域社会研究所 1994年6月
- 2 『詩人黄瀛回想編・研究編』蒼土社 1984年1月
- 3 『歷程 追悼・草野心平』歷程社 1990年2月号
- 4 安藤元雄等編『現代詩大事典』三省堂 2008年2月

- 5 深沢忠孝『草野心平研究序説』教育出版センター 1984年4月
- 6 草野心平研究会『草野心平研究一～四』
- 7 高橋夏男『流星群の詩人たち』林道舎 1999年12月
- 8 『新潮 日本文学小辞典』新潮社 昭和43年1月
- 9 吉田精一編『日本文学鑑賞辞典 近代編』東京堂出版 昭和35年6月
- 10 『美的』、『歷程』の各バックナンバー

<ABSTRACT>

## **Viewing the Poetry Specificity of Kou Ei (Huang Ying) and Kusano Sinpei from the Perspective of their Cross-Border Experience**

YANG Wei

Half Chinese and half Japanese, Kou Ei once shot across the sky of Japanese Poetry like a comet, and the friendship he had developed with poets like Kusano Sinpei and Miyazawa Kenji was handsomely profound. Starting with the fellowship between Kou Ei and Kusano Sinpei, who represent well China-Japan cultural boundary-crossers, the paper reflects on their resembling, yet contrasting, boundary-crossing experience, and analyzes in detail the enormous impact their individual experience has made upon their values and poetry composition, and therefore arrives at a discussion of the influence that cultural boundary-crossing exerts on this multi-cultural world.